

「放送英語ニュースを利用する英語コミュニケーション教育法」

山本英一（関西大学）

1. はじめに

英語運用能力の向上を目指し、訳読一辺倒の授業を廃して、もっと「発信型」授業への転換が叫ばれるようになって久しい。もっとも、「発信型」という言葉自体、すでに使い古された感があるが、ともかく従来のように文学作品や難解な評論文を日本語に置き換える作業に腐心するのではなく、一定量の語彙さえあれば、それを利用して自らの考えや主張を話したり書いたりする作業、言い換えれば「自己表現重視型」授業への転換が求められているのである。

このように「話す」・「書く」というと、「自らの考えや主張」の部分が脱落して、初対面の挨拶、自己紹介、道案内といったような、極言すれば「定式文句」でほぼ事足りるような状況ばかりが目立ってしまう嫌いがある。もちろん、そのような状況で適確な対応ができることは、英語学習者として当然のことであるが、まずは問題の「定式文句」を覚えることが先決である。ところが、脱落した部分、すなわち「自分の考えや主張」に「定式文句」など存在しない。暗記すれば事足りるという問題ではないのである。

数年前NHKで放送された番組で、日産自動車からフランス・ルノー社に副社長として出向した鈴木裕氏が適確に指摘したように、「英語であれ、日本語であれ、自分が言いたいことをまず頭の中にもたなければならぬ」のである。¹ところが現実には、学生たちは日本語の新聞さえ読まないし、放送も聞かない。少しフォーマルな話題について、「自らの考えや主張」を、しかも英語で、彼らに語らせるのは至難の技である。

自分の考えや主張をしっかりとった上で、それを表現する能力が求められている現在、メディア英語、とりわけ放送英語を活用することも、大きな選択肢の一つだと思われる。メディアを介することによって、私たちはその時々話題に敏感にならざるを得ないし、簡潔・明晰を旨とするレトリックに触れることもできるからである。つまり「アイデア醸成」と「表現法習得」の両方を並行して行なうことができるというわけだ。本発表では、前者にも注目しつつ、後者を中心に、放送英語による英語教育について考えたい。

2. 放送英語のメリット

筆者は1994年以来、CNN Internationalを用いた大学用教科書執筆者（金星堂、朝日出版）の一人として、これまでに5冊のテキスト編集に関わってきた。限られた紙面ではあるが、実例を通して放送利用のメリットを指摘する。まず、NTT DoCoMoの記事。

[1-a] Well, three power houses of the global telecoms industry joining forces to bid for a slice of Europe's third generation mobile phone market.

[1-b] Japan's NTT DoCoMo and Hong Kong's Hutchinson Whampoa are tying up with Dutch KPN Mobile. They're planning to bid for licenses in Germany, France, Belgium, and possibly Italy. Diana Muriel takes a look at what all this clubbing together could mean for consumers. (*English for the Global Age with CNN International Vol. 2, NTT DoCoMo*)

—逆ピラミッド型の談話—

限られた時間に凝縮されたストーリーは、新聞の場合と同様、いわゆる「逆ピラミッド」型に談話が展開している場合が多い。上の例でも、[1-a]がリードの役割を果たしており、ここで話のエッセンス（＝巨大通信企業3社の提携）が分かる仕組みになっている。[1-b]は、その詳細を伝えるもので、「起承転結」型の日本語式談話と異なる。放送を利用することで、ライティングはもとよりプレゼンテーション能力の習得に欠かせない、このような展開法を数多く学生に提示することが可能である。

—結束性—

上の[1-a]および[1-b]の談話における下線部は、すべて「提携（する）」を表わす。日本語では同語（句）反復で談話が展開するのに対して、英語では言い換えが多用される点に注目したい。つまり、結束性(cohesion)実現に関する、英語独特のレトリックに、学生たちが繰り返し曝されることも、番組利用のメリットの一つである。²

—つなぎ語—

短い時間に必要な内容を効率よく盛り込むために、so, in fact, actuallyなどの、いわゆる「つなぎ語」が果たす役割にも注目したい。

[2] Things aren't so exciting as it used to be around here. In fact, it's really starting to wind down. (*English for the Global Age with CNN International Vol. 2, The Final Days*)

この例は、任期切れ間近のクリントン大統領とホワイトハウスの沈滞ムードを揶揄する記事からの引用である。「ホワイトハウスに以前ほどの活況はない」から推論される「それでも一定の水準は保たれている」という言外の意味を in factが打ち消して、「いや、それどころか、沈滞ムードにどんどん拍車がかかり始めている」となっている。³これは「実際に」という定訳では捉えきれないニュアンスである。軽視されがちな「つなぎ語」の役割をまさに談話の中で定位し、英語のレトリック習得に役立てることができる。

3. むすび

上で紹介した例からもわかるように、いま社会で起こっている出来事について目や耳を通して情報がほぼリアルタイムで入ってくる時代である。放送英語は、そういったテーマに対する自分の主張や考えをまとめるきっかけとなり得る。問題は、政治経済などの時事トピックに対するリアクションを期待する教師や社会とは裏腹に、学生たちの関心が、スポーツ、(映画・音楽など)エンタテインメントに偏りがちで、両者に大きな隔たりがあることだ。⁴ また、時事トピックは、(特にペーパーメディアにしたとき)陳腐化が速いこともデメリットとして指摘しておく必要があるだろう。しかし、トピックの選定に気を配り、題材の新陳代謝を活発にするなどの工夫によって、放送英語を利用する上述のメリットをさらに活かす方策はいくらでもあるように思われる。放送英語は、「自己表現重視型」学習を充実させるための、いわば「宝庫」なのである。

注

1. 2000年10月28日に放送されたNHKスペシャル「英語が会社にやってきた」より引用。

2. 山本(2002)『「順序づけ」と「なぞり」の意味論・語用論』(第3章)を参照のこと。

3. 山本(2002)『「順序づけ」と「なぞり」の意味論・語用論』(第1章)を参照のこと。
4. 山本他(1997)「関西大学総合情報学部における英語教育—Needs Analysis と教材開発—」LLA 発表論文集 141-143.